幼児の人物画の描画特徴とその発達的推移について：調査研究を通しての一考察

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-09-27
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 橋本, 秀美
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4569

幼児の人物画の描画特徴とその発達的推移について ～調査研究を通しての一考察～

橋本　秀美
臨床心理学専攻・カウンセリングセンター相談員

要約

本研究では，保育所の幼児（3，4，5歳児）のグッドイナフ人物画知能検査の桐原（1944）による人物画の描画特徴と子どもの発達的推移について検討する。方法としては，A県の保育所の3歳児（男21名・女30名），4歳児（男21名・女32名），5歳児（男23名・女31名）の計158名を対象に調査を実施し，調査時期は2009年8月であった。その結果，3，4，5歳児の間に，知的発達，情緒発達，行動的発達に大きな差がみられた。さらに，実際の描画に臨床的な考察を加え，調査結果がほぼ支持された。園での問題行動がみられる子どもの描画にはいくつかの描画特徴としてのサインもみられ，それらの背景には，家庭での親子関係や養育環境の問題や，それらに伴う心理的課題，さらには発達課題などが推察された。これらの結果から，子ども達の大きく成長・発達するこの時期に適切な教育や保育についての重要な意味が確認された。今回の調査では，園の保育士評定を用いての情報となったが，今後は，さらに個別の調査による描画児童や親からの聴き取りや，その他のアセスメントによる総合的情報や，さらに，多くのデータ数による調査研究なども行いたい。

キーワード：人物画，描画特徴，発達的推移，幼児

問題

描画は，幼児期からの成長・発達につれて，いわゆる掻画から象徴画や図式画を経て，写実画へと変化することが知られている。1926年グッドイナフ（Goodenough，F. L）が人物画による知能の測定法を発表し，わが国では，1944年に桐原葆見によってグッドイナフ人物画知能検査が標準化された。さらに，1977年に小林重雄の手によって効率的な標準化が施され，『グッドイナフ人物画知能検査・ハンドブック』として出版され，描かれた人物の部分を，目，口，鼻，眉，耳，顔の輪郭，首，胴体，腕，手，指，足などについて，どの程度正確に描かれているかを測定するものである。

臨床場面において，幼児の描画特徴についての知見を得る機会は様々に経験するが，実際の幼児の人物画を数理的に分析し，その描画特徴と発達的推移についての検討を試みた研究は数少ない。

本研究の目的

本研究では，保育所の幼児（3，4，5歳児）の人物画について，グッドイナフ人物画知能検査の桐原の方法による描画特徴とパーソナリティの関連について，さらにその発達的推移について検討する。

方法

A県の保育所の3歳児（男21名・女30名），4歳児（男21名・女32名），5歳児（男23名・女31名）の計158名を対象に調査を実施し，調査時期は2009年8月であった。

施行方法については，対象幼児に人物画を実施

し，担任保育士に質問項目への回答を求めた。具体的には各クラス担任の観点から，各調査対象児のパーソナリティに関する11の質問（友達の人数，屋内外の遊びの好き嫌い，遊びが複数か単独か，明るさ，外向性，勝ち気，正義感，協調性の有無，真面目さ，頑固さ，集中力の有無）について回答を求め，それらを参考に，より対象幼児の特性を明確化できるように項目を改良し友達の人数を除く10項目とした。

調査対象が3，4，5歳の幼児のため，グッドイナフ人物画知能検査（桐原，1944）を主軸にするが，本来の採点項目より項目レベルを緩和し，描画採点項目は，1.頭，2.足，3.腕，4.手，5.胴の有無。6.腕・足の付き方。7.首，8.目，9.鼻，10.口，11.髪，12.服，13.指の有無。14.指の数が正しいか。15.肩，16.踵の有無。17.描線の強弱。18.顔が左右対称か。19.耳，20.眉，21.まつ毛，22.瞳，23.笑顔の有無。24.描かれている人数（単・復）。25.人物の大きさ。26.人物の位置。27.裏面の絵，28.背景の有無。以上，前出の情緒採点項目10項目とこの描画採点項目28項目の，計38項目を実施した。

結果と考察

Ⅰ　調査研究の数理統計分析

性別について全ての項目の関係性を見るためにχ^2検定を行い，クロス集計表に示した。その結果いくつかの項目に有意な差がみられた。調査対象児の属性を表1に示す。

表1　調査対象児の属性

		年齢		
		3歳	4歳	5歳
性別	園	人数	人数	人数
男	A	10	9	14
男	B	17	18	16
女	A	11	12	9
女	B	13	14	15

1. 性別による検討

1）性別と遊び（内・外）との関係性

性別と遊び（内・外）の関係性について，153名の有効データについてχ^2検定を行い，クロス集計を表2に示す。5％水準で有意な相関が見られ，男児の方が女児に比べて屋外で遊ぶ評定が有意に多い（$\chi^2=4.83$，$df=1$，$p<.05$）。

表2　性別と遊び（内・外）とのクロス集計表

			性別		
			男	女	合計
遊び(内外)	中	度数	34	45	79
		性別の％	43.0%	60.8%	51.6%
	外	度数	45	29	74
		性別の％	57.0%	39.2%	48.4%
合計		度数	79	74	153
		性別の％	100.0%	100.0%	100.0%

男児の主な遊びの種類としては，サッカー，虫探し，竹馬など，一方女児は，お絵描き，おままごと，絵本読みなどであった。男児の方が外で活発的に運動し，身体を動かすという一般的傾向が示された。しかし，有意差5％などからも，近年の男女差の接近や，外遊びしない子どもの増加などが推察される。

2）性別と集中力の有無との関係性

性別と集中力の有無について，158名の有効データについてχ^2検定を行い,クロス集計を表3に示す。性別と集中力の有無の関係性については，1％の水準で女児に比べて男児の方が，集中力が足りない評定が有意に多かった（$\chi^2=6.81$，$df=1$，$p<.01$）。

表3　性別と集中力の有無とのクロス集計表

			性別		
			男	女	合計
遊び(内外)	中	度数	34	45	79
		性別の％	43.0%	60.8%	51.6%
	外	度数	45	29	74
		性別の％	57.0%	39.2%	48.4%
合計		度数	79	74	153
		性別の％	100.0%	100.0%	100.0%

これらの結果から，注意集中困難などの特性が男児の方が多いこととの関連も推察される。また，あくまで担任の先生の観察での評定ではあるが，集中力のない幼児が全体の約15％であり，これは，小学校児童の文科省全国調査の数値よりも高く，やはり幼児期は，好奇心旺盛で落ち着きのない時期とされることとの関連などが考えられる。

2. 年齢による検討

1）年齢と協調性の有無との関係性

年齢と協調性について，158 名の有効データについて χ^2 検定を行い，クロス集計を表 4 に示す。

表 4　年齢と協調性の有無とのクロス集計表

			年齢 3歳	4歳	5歳	合計
協調性	なし	度数	50	52	23	125
		年齢の％	98.0%	98.1%	42.6%	79.1%
	有り	度数	1	1	31	33
		年齢の％	2.0%	1.9%	57.4%	20.9%
合計		度数	51	53	54	158
		年齢の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

3，4 歳児に比べ 5 歳児の方が協調性あり評定が，0.1％の水準で有意に多かった（$\chi^2=66.22$, $df=2$, $p<.001$）。

表 4 から，協調性ありが 3 歳から 5 歳，特に 4 歳から 5 歳では急増していることから，この間に子ども達の情緒面の大きな変化が推測される。これらの背景には，5 歳では認識できる情報が増え，周囲との人間関係や連携を習得し始め，また年長になることから，他者に役立つ有用感などをもつようになるなど様々な発達的変化との関連が考えられる。

2）年齢と遊び（1 人・複数）との関係性

年齢と遊び（1 人・複数）について，153 名の有効データについて χ^2 検定を行い，クロス集計を表 5 に示す。0.1％の水準で 4，5 歳児に比べて，3 歳児の方が 1 人遊びの評定が有意に多かった（$\chi^2=15.98$, $df=2$, $p<.001$）。

1）の年齢による協調性の増大との関連が推察されるが，協調性が 5 歳で急増することに対して，複数遊びが 4 歳から高くなることから，複数で一緒に遊ぶことは，協調性よりも早期に出現している。協調が，一緒に遊ぶという行為に比べて，自分だけではなく相手との関係性に準ずる点が強い行為とも考えられ，一緒に遊ぶことが協調よりも早期に出現しやすいとも考えられる。

表 5　年齢と遊び（1 人・複数）とのクロス集計表

			年齢 3歳	4歳	5歳	合計
遊び(1人・複数)	1人	度数	32	15	16	63
		年齢の％	64.0%	30.6%	29.6%	41.2%
	複数	度数	18	34	38	90
		年齢の％	36.0%	69.4%	70.4%	58.8%
合計		度数	50	49	54	153
		年齢の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

3. 描画項目とパーソナリティによる検討

1）遊び（1 人・複数）と線の強弱との関係性

遊び（1 人・複数）と描線の強弱について，有効データ 152 について χ^2 検定を行い，クロス集計を表 6 に示す。

表 6　線の強弱と遊び（1 人・複数）とのクロス集計表

			線(強・弱) 強	弱	合計
遊び(1人・複数)	1人	度数	46	17	63
		線(強・弱)の％	36.5%	65.4%	41.4%
	複数	度数	80	9	89
		線(強・弱)の％	63.5%	34.6%	58.6%
合計		度数	126	26	152
		線(強・弱)の％	100.0%	100.0%	100.0%

弱い描線より強い描線の方が，複数人数で遊ぶ評定が 1％水準で有意に多かった（$\chi^2=7.41$, $df=1$, $p<.01$）。3 歳児に 1 人遊びが最も多く，さらに，3 歳児に描線が弱い者が最も多い結果となった。これらのことから 4，5 歳児で複数で遊ぶ者は，描線が強く，3 歳児で 1 人で遊ぶ者は，描線が弱いと考えられる。

2）年齢と描線の強弱との関係

さらに，年齢と描線の強弱との関係について，157 名の有効データについて χ^2 検定を行い，クロス集計を表 7 に示す。年齢と線の強弱の関係性については，0.1％水準で，4，5 歳児に比べて，3 歳児の方が描線が弱い人数が多かった。描画の発達段階との関連が考えられる。

表 7　年齢と線（強・弱）とのクロス集計

			年齢 3歳	4歳	5歳	合計
線(強・弱)	強	度数	29	49	52	130
		年齢の％	56.9%	92.5%	98.1%	82.8%
	弱	度数	22	4	1	27
		年齢の％	43.1%	7.5%	1.9%	17.2%
合計		度数	51	53	53	157
		年齢の％	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

3）遊び（1 人・複数）と笑顔の有無との関係

遊び（1 人・複数）と笑顔の有無について，153 名の有効データについて χ^2 検定を行い，クロス集計を表 8 に示す。

表 8　遊び（1 人・複数）と笑顔の有無とのクロス集計表

			表情(笑・無笑)		
			笑	無笑	合計
遊び(1人・複数)	1人	度数	29	34	63
		表情(笑・無笑) の %	32.6%	53.1%	41.2%
	複数	度数	60	30	90
		表情(笑・無笑) の %	67.4%	46.9%	58.8%
合計		度数	89	64	153
		表情(笑・無笑) の %	100.0%	100.0%	100.0%

笑顔を描いている者は，描かない者に比べて，複数で遊ぶ評定の人数が，5 %水準で有意に多かった（$\chi^2=6.49$，$df=1$，$p<.05$）。これについても，笑顔を描くことの描画の発達段階との関連も推察され，また 3 歳では，月齢によっても知的発達が大きく変わってくることなども考慮する必要がある。

4）協調性と笑顔の有無との関係性

協調性と笑顔の有無との関係性について有効なデータ 158 名のデータを基に χ^2 検定を行い，クロス集計を表 9 に示した。

表 9　協調性と笑顔の有無とのクロス集計表

			表情(笑・無笑)		
			笑	無笑	合計
協調性	なし	度数	60	65	125
		表情(笑・無笑) の %	66.7%	95.6%	79.1%
	有り	度数	30	3	33
		表情(笑・無笑) の %	33.3%	4.4%	20.9%
合計		度数	90	68	158
		表情(笑・無笑) の %	100.0%	100.0%	100.0%

笑顔を描いている者が描いていない者に比べて，協調性ありの評定人数が，5 %水準で有意に多かった（$\chi^2=6.49$，$df=1$，$p<.05$）。協調性の発達が年齢による相違がみられることから，笑顔の描画表現が，協調性や情緒の発達と，一方では描画発達や描画技術の習得度などの双方との関連が推察される。

表 10　協調性と背景の有無とのクロス集計表

			背景		
			なし	有り	合計
協調性	なし	度数	82	43	125
		背景 の %	91.1%	63.2%	79.1%
	有り	度数	8	25	33
		背景 の %	8.9%	36.8%	20.9%
合計		度数	90	68	158
		背景 の %	100.0%	100.0%	100.0%

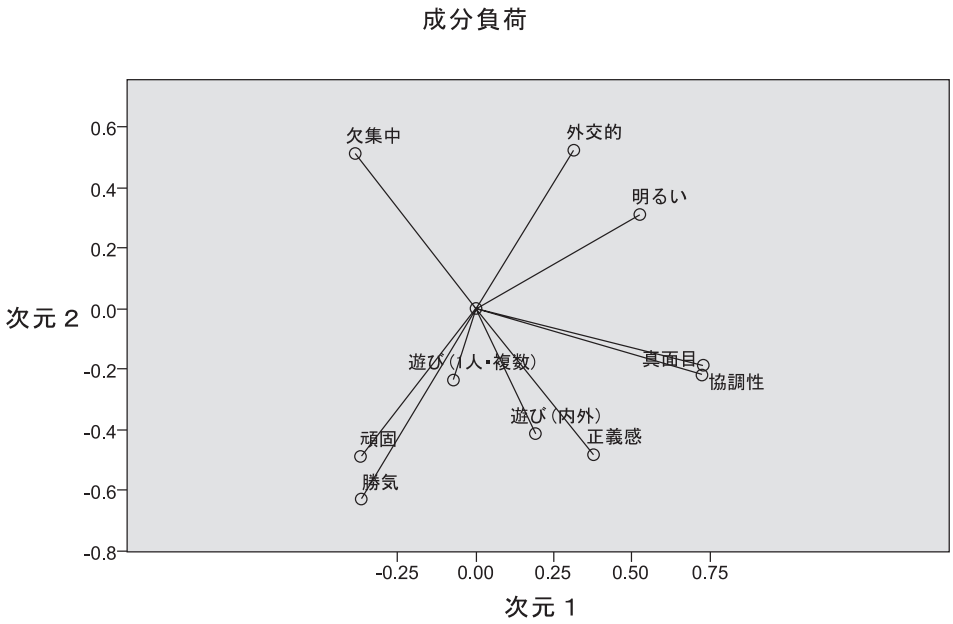

図 1　パーソナリティ項目 10 項目のカテゴリーデータ

5）協調性と背景の有無との関係性

協調性と背景の有無について，有効データ 158 を χ^2 検定を行い，クロス集計を表 10 に示す。

背景を描く者の方が描かない者に比べて，協調性がある評定が，0.1%水準で有意に多く（$\chi^2=15.98$, $df=1$, $p<.05$），年齢による情緒の発達との関連が推察される。協調性は，周りの存在との象徴的な態度であり，背景に友達や自分の好きな花や遊びを描くことは容易に想像できる。さらに，描画発達の差も考えられる。また背景を描くにもその想像力やスキルが必要となり，情緒が豊かな子どもは背景を描くことに関連するとも考えられる。

4. パーソナリティ項目相関関係

保育士評定 10 項目について，類似の反応をしている項目同士を近くに集める（カテゴリーデータの主成分分析，spss.ver.17）を用いた分析を行い，その結果を 2 次元表面上に示す（図 1）。図 1 から「頑固」評定は「勝ち気」と評定されることと類似し，「真面目」評定は「協調性」があると評定されること類似することが示された。また，協調性と欠集中が対極しているという位置関係が見られる。

5. 総合考察

調査研究から得られた，3，4，5 歳の幼児の年齢ごとの描画特徴および，描画特徴とパーソナリティの関連について，数理統計的に分析を行った。その結果，いくつかの描画特徴に発達年齢ごとに差がみられた。さらに，描画特徴とパーソナリティとの関連を分析したところ，それらにもいくつかの性差や年齢・発達段階ごとの差がみられた。これらの背景には，知的発達，情緒発達，行動的発達等の特徴やその違いがあるのではないかと推察された。これらの結果から，3，4，5 歳の幼児期には，子ども達の大きく成長発達することが描画特徴を通して，明らかとなり，この時期に，適切な教育や保育が重要な意味をもつことがあらためて確認された。

次に，Ⅱ　事例研究を通して，実際の描画を提示し臨床的な考察を加えたい。

Ⅱ　事例研究

Ⅱ－1 では，調査データの数理分析結果による特徴的な描画について，調査協力保育士より聴き取りによる情報収集を行い，特徴的な描画を例示し，臨床的な側面から考察を行う。

Ⅱ－2 では，園での不適応行動のみられる幼児の描画について，調査協力保育士からの再度の聴き取りによる詳細な情報収集を行い，提示された描画について，その描画特徴を検討する。

1. 描画事例

描画事例 1

性別と集中力の有無の関係［1. 2)］の描画例

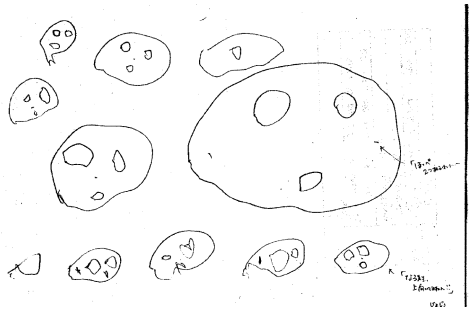

図 2：描画 1【集中力不足評定】の【男子】の人物画

描画事例 2

性別と集中力の有無との関係［1. 2)］及び遊び（1 人・複数）と線の強弱との関係［3. 1)］の描画例

図 3：描画 2【集中力不足評定】及び【筆圧弱い】，
【複数遊びしない評定】の 4 歳【男子】の人物画

＊保育士コメント「集中力がない・多動」

描画事例 3

性別と集中力の有無の関係［1－2)］及び遊び（1 人・複数）と笑顔の有無の関係［3－2)］の描画例

図 4：描画 3【集中力不足評定】【笑顔が描かれず】，【複数遊びしない評定】5 歳【男子】の人物画

＊保育士コメント「集中力がない，すぐに手を出す」

描画事例 4

遊び（1 人・複数）と線の強弱との関係［3. 1)］の描画例

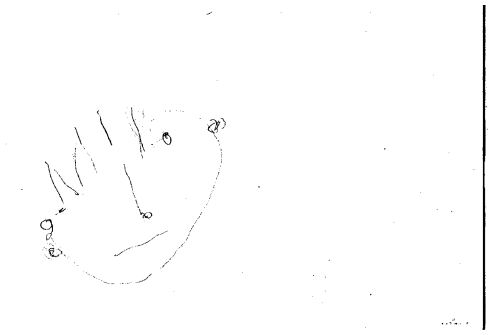

図 5：描画 4【筆圧弱い】，【複数遊びしない】3 歳女子の人物画

＊保育士コメント「勝ち気で一人遊び」

描画事例 5

遊び（1 人・複数）と線の強弱［3. 1)］の関係の描画例

図 6：描画 5【筆圧弱い】，【複数遊びしない】3 歳女子の人物画

＊保育士コメント「真面目で，一人遊び」

描画事例 6

遊び（1 人・複数）と線の強弱［3. 1)］との関係及び遊び（1 人・複数）と笑顔の有無［3. 3)］の関係の描画例

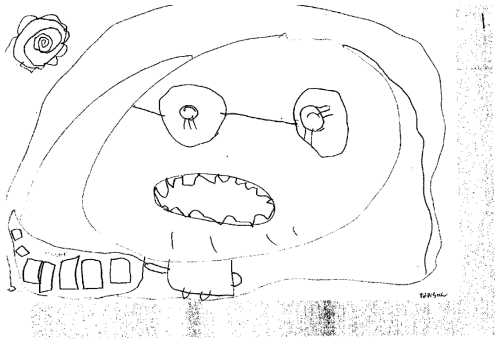

図 7：描画 6【筆圧弱い】，【複数遊びしない】及び【笑顔なし】の 4 歳女子の人物画

＊保育士コメント「頑固で，一人遊び」

描画事例 7

遊び（1 人・複数）と笑顔の有無［3. 3)］の関係の描画例

図 8：描画 7【複数遊び】で，【笑顔描写】の
4 歳女子の人物画

＊保育士コメント「勝ち気で，皆と一緒に遊ぶ」

描画事例 8

遊び（1 人・複数）と笑顔の有無の関係［3. 3)］の描画例

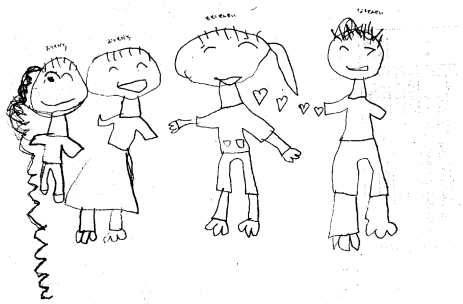

図 9：描画 8【複数遊び】で，【笑顔描写】の
4 歳女子の人物画

＊保育士コメント「正義感ありしっかり者，皆と遊ぶ」

描画事例 9

遊び（1 人・複数）と笑顔の有無の関係［3. 3)］の描画例

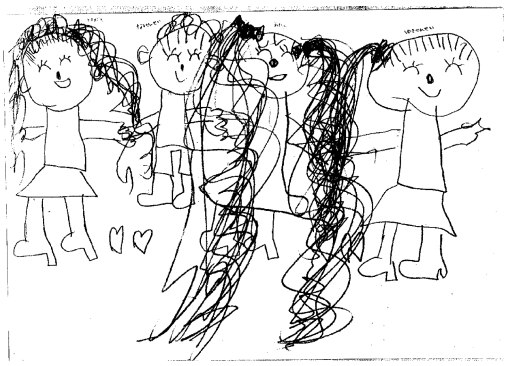

図 10：描画 9【複数遊び】で，【笑顔描写】の
4 歳女子の人物画

＊保育士コメント「内気だが複数遊びできる」

描画事例 10

遊び（1 人・複数）と笑顔の有無［3. 3)］の関係の描画例

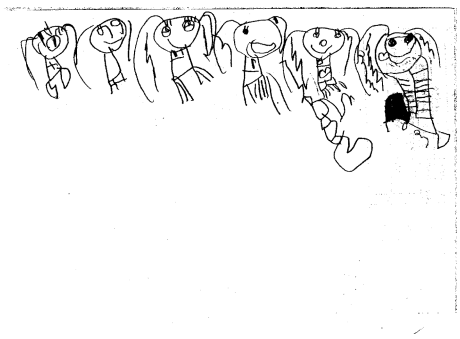

図 11：描画 10【複数遊び】で，【笑顔描写】の
3 歳女子の人物画

＊保育士コメント「勝ち気だが，複数遊びする」

描画事例 11

遊び（1 人・複数）と線の強弱との関係［3. 1)］，及び遊び（1 人・複数）と笑顔の有無との関係［3. 3)］，及び協調性と背景の有無との関係［3. 4)］の描画例

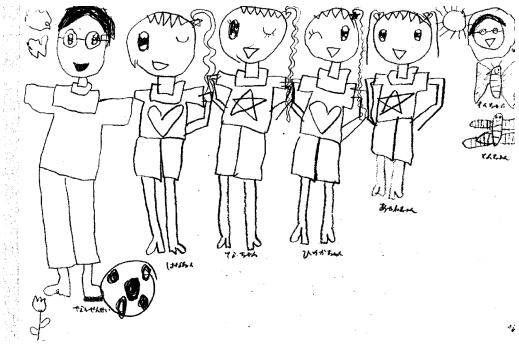

図12：描画11【複数遊び】で【筆圧が強い】
【複数遊び】で，【笑顔描かれている】
【協調性あり】で，【背景の描かれている】
5歳女子の人物画

＊保育士コメント「明るい，外向的，正義感あり，協調性あり，真面目，勝気」

描画事例12

遊び（1人・複数）と笑顔の有無との関係［3. 3)］，及び協調性と背景の有無との関係［3. 4)］の描画例

図13：描画12【笑顔あり】で，【複数遊び評定】
【背景描き】，【協調性高い評定】の
5歳男子の人物画

＊保育士コメント「協調性あり，内向的，真面目，正義感あり」

描画事例13

遊び（1人・複数）と笑顔の有無との関係［3. 3)］，及び協調性と背景の有無との関係［3. 4)］の描画例

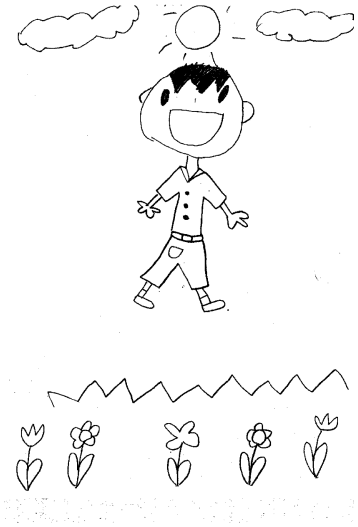

図14：描画13【笑顔が描かれ】，【複数遊び評定】
【背景が描かれ】，【協調性あり評定】の
5歳女子の人物画

＊保育士コメント「協調性あり，真面目，内向的，正義感あり，5歳女児」

描画事例14

協調性と背景の有無との関係［3. 4)］の描画例

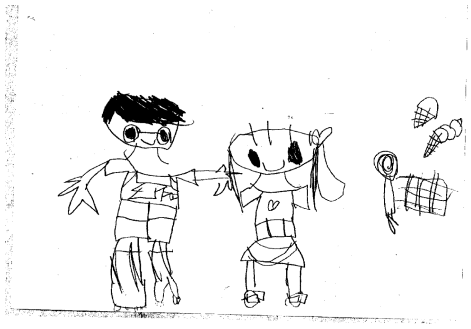

図15：描画14【背景描かれ】，【協調性あり】の
4歳女子の人物画

＊保育士コメント「協調性あり，明るい，正義感あり，4歳女児」

2. 不適応事例の人物画

事例1

内向的で一人ぼっち（保育士評定）の4歳男児

用紙の裏表ともに絵を描いた。頭と胴体のみの人物（表）と奇異な人物（裏）。（図 16，図 17）

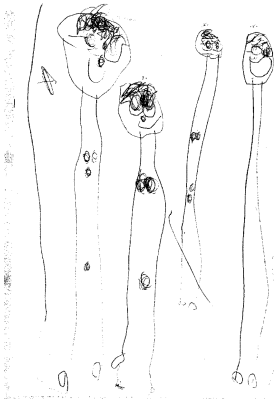

図 16：用紙の表の人物画

図 17：用紙の裏の人物画

事例 2

対人関係悪い，集中力なし，内向的（保育士コメント）の 5 歳男子（図 18）

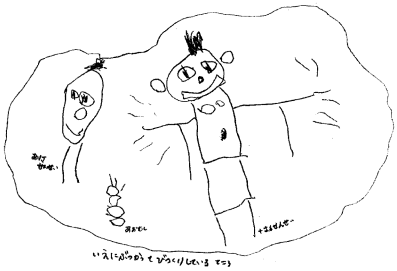

図 18

描画特徴：包囲の様式が用いられ，描画児の対人関係の不安や防衛などが投影されている（橋本，2004b，2005）

事例 3

園での問題行動（他児への暴力や集団飛び出し等），家庭の問題（離婚後母親の養育放棄傾向）（保育士コメント）の 3 歳男子（図 19）

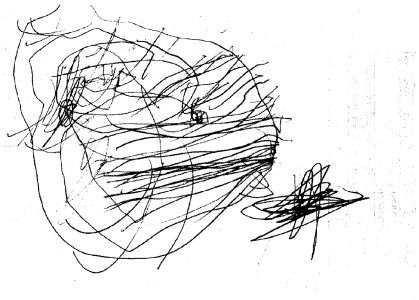

図 19

描画特徴：顔の描写の発達指標の遅れの背景に知的発達の問題あるいは，心理的課題，発達課題などが伺える。黒く塗りつぶしの様式の使用から，自己否定感や周囲から受け入れられない感情表出なども伺われる（橋本，2005）

事例 4

園での問題行動（勝ち気で友達とのケンカが絶えない，保育士の指示に反抗的等）や母子関係の問題（弟が最近産まれて母親への甘えや注目行動に母親が困惑）など（保育士コメント）の 4 歳女子

用紙の裏表ともに絵を描いた（図 20，図 21）

図 20：用紙の表の人物画

図 21：用紙の裏の人物画

描画特徴：4歳児の発達指標から遅れのみられる人物画を最初に描き，黒い塗りつぶしや，背景の描き込みからは，本児に特に知的遅れがみられない幼児であるという保育士からのコメントなどから，本児のもつ心理的課題や情緒の問題が推察される（橋本，2004b）。迷わず用紙の裏に描いた人物画は，いかにも，本児と産まれたばかりの弟，父親，母親の4人を描き，区分の様式を用いて，それぞれの人物間の心理的や葛藤が表現されているようである（橋本，2004a，2004b）。実際調査協力保育士に対して，最も小さく黒く塗りつぶされたのが自分で，左側上下の人物像が父親と母親，そして右下の最も大きく描かれた大木のように描写された絵が弟と話している。産まれたばかりの弟への脅威と自己の存在の危うさが描かれているようでもある

事例5

園での不適応行動（友達に攻撃的関わりが多く，友達から孤立気味），家庭の問題あり（両親の別居等）（保育士コメント）の4歳男子（図22）

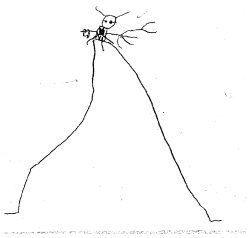

図 22

描画特徴：高い丘陵の上に立つ人物像は，本児の園での孤立状態を示唆しているようでもあり，また葛藤的な家庭の中にいる不安定な自己の姿とも伺われる。その人物は，棒人間様であり，さらにその手に持っているとがった物体は，凶器のようにもみえ，本児のかかえきれない内面の攻撃性が表現されているようでもある。

※提示した図2〜図21の描画については，先に述べたように適切な倫理的手続きを経ている。

さらに，事例1〜事例5については，本例の解釈に影響を与えない範囲で，若干の修正を加えている。

Ⅲ　総合考察

調査研究から得られた，3，4，5歳の幼児の年齢ごとの描画特徴および，描画特徴とパーソナリティの関連について，数理統計的に分析を行った。その結果，いくつかの描画特徴に発達年齢ごとに差がみられた。さらに，描画特徴とパーソナリティとの関連を分析したところ，それらにもいくつかの性差や年齢・発達段階ごと差がみられた。これらの背景には，知的発達，情緒発達，行動的発達等の特徴やその違いが推察された。これらの結果から，3，4，5歳の幼児期には，子ども達の急速に成長発達が描画特徴を通して確認された。

さらに，実際に描かれた描画からも，数理統計的分析を支持する描画特徴が得られ，いくつかの描画例を本論に提示した。さらに，調査協力保育士から，園での問題行動のみられる幼児の描画について，描画後の聴き取りを実施した事例について，その本研究から得られた知見を加味し臨床的検討を加えた。その結果，園での問題行動がみられる子どもの描画にはいくつかの描画特徴としてのサインもみられ，それらの背景には，家庭での親子関係や養育環境の問題や，発達課題などが推察された。これらの結果から，教育や保育の現場では，子ども達の大きく成長するこの時期に適切な教育や保育が重要な意味をもつことがあらためて確認された。今回の調査では，園の保育士評定を用いての情報収集となったが，今後は，さらに個別の実施などを行い，幼児や親からの聴き取り

やその他のアセスメントなどによる総合的情報などを得るなどし，一方では，データ数をさらに増やした調査研究なども行いたい。

文献

J・H・ディ・レオ（1999）：絵にみる子どもの心の発達分析と統合　誠信書房　DI LEO, J. H: Child Development: Analysis and Sythesis

桐原葆見（1944）：精神測定　三省堂

小林重雄（1977）　DAM グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック　三京房　p 1-50

橋本秀美（2004a）：肯定・否定感情に着目した共感性尺度の開発　心理臨床学研究，22(6)，637-647

橋本秀美（2004b）：描画にみられる共感性に関する臨床心理学的研究　風間書房

橋本秀美（2005）：描画ににおける人物像の顔の方向と共感性との関連　心理臨床学的研究，23，412-421

橋本秀美著　高橋依子編（2009）：スクールカウンセリングに活かす描画法―絵にみる子どもの心　金子書房